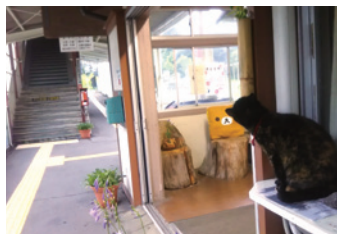


Living device

Step up 「あたらさん」的 生活考

【あたら 可惜】とは「もったいない」の古語で「あたらしい」の語源になったといわれています。【あたら＝もったいない】に【さん＝SUN＝太陽】の恵みをプラスして、さまざまな情報を発信しています。



爪を隠すことを知らない、元・野良のフーは、接客業には不向きですが、ネズミの捕獲にかけては、幾つになっても衰え知らずの技量です。



2回目の出産で生まれた子どもたちと最後の昼寝をするフー。この後、子猫は東京の自宅へ。雄猫トラはご町内の人気者に成長しました。



来たときは「ボロ雑巾のよう」でしたが、今では毛艶がとても良く、いつまでも小柄なので、乗降客からは「かわいい!」の声がかかります。

那須 由莉：らびず舎・代表

多くの家庭実用書や生活情報誌の編集に携わる。2005年『暮らしの手帖別冊・あたらさん』の編集長として、創刊と同時に「しなの鉄道・信濃追分駅」駅舎に「あたらさん編集室」を設置、別冊の休刊後も継続して駅舎を借り、現在に至る。「もったいない＝あたらさん」の知恵と心をコンセプトに、編集・制作と創作活動を続ける。信濃追分駅「オオヤマ桜を守る会」、軽井沢・借宿「ピオトープKBS」のメンバー。

駅舎暮らし、10年以上続いたのは猫のおかげ! — 猫まみれの1年は神様からのプレゼント —

和歌山電鉄・貴志川線の無人駅「貴志」で、猫のたまが駅長に任命され、人気沸騰したのは2007年でしたが、同年、「信濃追分」駅では次々に猫が産まれていました。母親の名前はフー、風来坊のフー。2006年の晩秋から線路脇の倉庫やトイレの辺りをウロウロ、倉庫前に餌を置くとこちらの様子を伺いつつ、しつかり平らげてどこかに消えます。お皿の位置を少しずつ駅舎寄りにして、ついに台所の中で食事をするまでに。寝床も用意し、飼い猫の印として首輪をつけ「フー」と呼ぶのに馴染んだ頃「この猫、妊娠していない?」と友人から驚愕の発言。

『まさかあ。』が、現実となってお腹は膨らみ続け、早春駅舎の和室にあるコタツの中で、フーは4匹の雌を出産! 「信濃追分」にちなんだ、信ノシン、濃ノノン、追ノオイ、分ノブン、はスクスク育ち、3か月後、優しい里親に恵まれ、各々駅舎から、遠く、近くに旅立ちました。

『さあ、フーに避妊手術を!』と考えていた矢先、まさかのご懐妊第2弾。夏の盛り、デスクの下でクロ、トラ、マダラの愛くるしい3匹が誕生。猫まみれの至福の1年に。

3匹の子を駅長にして:と、言う人もいましたが猫はネズミを退治してくれる大切な生き物。昔から、自由気ままに人の暮らしと共存してきた猫を駅長見習いにする気にはなれず、子猫は東京の自宅に連れ帰りました。

子育てから解放されたフーは、抜群の捕獲力で、野ネズミに悩まされる高原の駅舎暮らしに貢献し続けています。